

2019年度 入学式

式辞

本日、ここに多数のご来賓の皆様、関係各位のご臨席のもと、2019年度東京理科大学入学式を挙げるにあたり、学長としてご挨拶申し上げます。

新入生の皆さん、大学院に進学された皆さん、ご入学、ご進学おめでとうございます。実り豊かな学生生活を送られることを心より願っています。学生の皆さんを今日まで支えてこられたご家族の方々にも、お慶び申し上げます。

東京理科大学は、1881年に設立された東京物理学講習所をその起源としています。創設されたばかりの東京大学理学部物理学科の卒業生を中心に、21人の若き理学士らによって作られました。明治初期の自由民権運動を時代背景として、フランス人教師から教育を受けた、市民的エリートであった彼らにより、「理学の普及を以て国運発展の基礎とする」という建学の精神のもと、設立されたのです。その後、東京物理学校に改称され、幾多の困難を乗り越え、自律的精神の下、主体的に同盟を結んだ彼らにより、維持、運営されてきました。これは東京理科大学を特徴づける重要な原点になっています。

創立者の幾人かは、海外に留学し、当時の最先端の学問を修めています。その一人である寺尾寿は、フランスに留学、パリ天文台において研究する傍ら、パリ大学で数学と天文学を修めました。帰国後、東京物理学校の初代校長を務めてい

ます。

設立にかかわった彼らは、理学への気概に満ち、情熱に溢れた教育者でした。その志は、東京物理学校で学ぶ学生たちにも共有され、真に実力を身に付けた者のみが卒業していました。当時から「実力主義」の学校として定評があったのです。東京理科大学となった今日でも、その伝統は脈々と受け継がれています。

東京物理学校は、戦後の学制改革により、東京理科大学となり、東北帝国大学第6代総長であった本多光太郎が初代学長を務めました。彼も大学を卒業したばかりの若い頃、ヨーロッパに留学し、金属の磁性に関する研究をしています。寺尾寿や本多光太郎が経験した当時の留学と今の留学は、時代も異なり、同じではありませんが、異なる環境に身をおいて勉学に励むという点において、変わりはありません。皆さんも広く世界に目を向け、経験を積み、グローバルに活躍してほしいと思います。

本多学長は「学問のある所に技術は育つ、技術のある所に産業は発展する、産業は学問の道場である」と喝破し、東京理科大学を研究レベルの高い大学に導くとともに、社会に役立つ大学を目指し、産学連携の先駆けとなりました。本学は、東京物理学校以来の伝統を受け継ぎ、科学技術の分野で多くの専門家を育てました。卒業生たちは、優れた理数系教員、技術者、研究者として、日本はもとより、世界で活躍し、科学技術の発展に貢献しています。彼らの活躍もあり、日本は急速な経済成長を遂げ、世界で最も進んだ国の一つに発展しました。

しかし、現在、世界は多くの社会的課題を抱えています。産業構造の急激な変化、地域間格差の拡大など、国内のみならず、世界的な課題は複雑化し、深刻さを増すばかりです。最近、国連で採択された「持続可能な開発目標：SDGs」を思い起こしてください。SDGsには、我々が認識すべき社会的課題と目標が示されていますが、明確な解決方法が示されている訳ではありません。世界が力を合わせて解決方法を研究し、実行していく必要があります。最も重要な概念は「多様性」と「誰一人取り残さない」です。

皆さんは、本学の輝かしい歴史を受け継ぐ主役となりました。大きく世界に目を向け、私たちが直面する課題解決に取り組むべく、学問への気概を持って、有意義な大学生活を送ってほしいと思います。

ここで、私が大学に入学した当時のことを思い出してみましょう。学生運動の嵐が吹き荒れ、入学後しばらくして無期限ストに突入するという、学生にとっても、教員にとっても激動の時代でした。大学の価値とは、学問の価値とは、考えざるを得ない状況におかれまして。やがて大学は正常に復し、十分な総括も無く、再び勉学に取り組むことになりました。しかし、当時の思索や悩みは、長い人生において無駄ではなかった、むしろ得るものが多かったと思います。皆さんも、感性豊かな今、じっくりと考える習慣を身に付けてください。これこそが皆さんの教養を、知性を、磨くことになると確信しています。

世界は様々な社会的課題を抱えていると申しました。大学についても同様に、

如何に社会に貢献出来るかが問われ、多様な教員の任用、学部の枠を超えた教育分野の編成、社会人の受け入れ、各方面との連携など、様々な取り組みが求められています。社会の公器として、大学や産業界との連携、ガバナンスの強化などにより、機動性を活かし、教育の質の担保、社会の変化に対応した教育と研究の推進・高度化が、喫緊の課題となっています。その為には、不断に外部の意見を取り入れ、社会への説明責任を果たし、真の連携を維持、拡大していくことが必要です。

社会の公器たる大学としての価値は、今現在、如何に教育と研究に貢献しているかで決まります。本多学長曰く、「今が大切」です。大学として、如何に優秀な研究者、教育者を任用し、高度な研究を行い、教育に生かすかが問われています。如何に研究教育環境を豊かにしていくかが問われています。まず、私たちが本学の理念を体現し、皆さんと一緒に、教育と研究を押し進めていく、気概と矜持を持つことが必要です。全力を挙げて社会からの負託に応えていきたいと思っています。

学術の発展を歴史的観点から見ると、様々な活動により得た断片的な知見を集め、体系化し知識としてきました。分野を限定して知識を深め、蓄積することは、人類の発展には必須で、今後も必要です。その反面、知識の際限のない細分化、複雑化は、科学技術の専門家同士の連携すら困難な状況を生んでおり、地球環境問題など、社会的課題の解決を困難にしています。こうした状況を打ち破るには、

これまでに構築された専門的知識をつなぎ、協調していける仕組みを作ることが重要です。着実に理解を進め、その分野の知識を積み上げることも大事ですが、少し離れて研究や学びを見つめ直し、自らの立ち位置を確認し、何が真に重要なのかを理解しておくことは、それにもまして大切です。さらに、実際の行動に繋げることが重要です。

大学は、社会から学問の自由を負託された存在で、自律した個人の集団です。研究者は、自律的判断に基づいて、確信を持って行動しています。この自律性が学術の発展に不可欠であることを、歴史の教訓から学んでいます。しかし、各専門分野に安住しているだけでは、大きな力にはなれません。境界領域に存在する新たな学術には貢献できません。社会が直面する課題を解決することはできません。大学という多様な組織体は、自律分散しているだけではなく、時に協調して活動できる仕組みを持つ必要があります。そうした活動を有効にするのは、明確な目標の設定であり、それを支える広い意味の教養です。深い教養に裏打ちされた知性です。

本学では、昨年度から、学生、教員が一体となって、教養教育を推進する仕組みである、教養教育センターを立ち上げました。一見無駄に見える「学び」にこそ、異なる価値観に共鳴し得る力にこそ、教養を、知性を磨く源泉があります。是非、皆さんもこの活動に参加してください。「思考の同伴者」を獲得してください。

さらに、今年度から、人工知能、データサイエンスに関連する教育と研究を推進するセンターを立ち上げ、学部横断型の教育として、数理統計、機械学習、アルゴリズムなどの科目群を、全ての学生が履修できるようにしました。

また、他機関との連携が必要との社会からの要請に応え、例として挙げれば、東京大学、産業技術総合研究所と連携協力に関する覚書を締結するなど、海外を含め、教育研究環境の高度化に努めて参りました。是非、本学の豊かな教育研究環境を、享受してください。

私たち教職員は、皆さんの学びの充実に向けて、全力を尽くして参ります。しかし、学びとはフォロワーになることではありません。自ら考え、目的を設定し、行動を起こして、自律した個人として勝ち取るものです。皆さんには、本学の豊かな教育研究環境を最大限に活用し、最先端の専門知と幅広い教養とを併せ持った、知のフロントランナーとなってほしいと思います。私たちとともに、大学を、社会を取り巻く困難な状況を、打破してくれることを望みます。

本日は、多くのご家族の皆様、ご関係の方々にもご臨席賜っております。東京理科大学に入学、進学した皆さんは、私たち教職員とともに、未来に向かって出発しました。暖かく見守って頂きますようお願い申し上げます、式辞と致します。

2019年4月9日

東京理科大学 学長 松本洋一郎